

Lycidas における名詞の効果的使用

On Effective Use of Nouns in *Lycidas*

山 津 さゆり
Yamatsu, Sayuri

ABSTRACT

In this thesis, I will examine how effective uses of proper nouns, nouns, and noun phrases enhance the quality of *Lycidas*, which describes Milton's lament over his friend's death, his recovery from despondency, and his determination to start afresh. The characteristic of the proper nouns used in this poem is that many of them are not very familiar to common readers, which is in sharp contrast to Shelley's *Adonais*, another major English elegy. This unfamiliarity is put to good use. Some nouns and noun phrases are effectively used as substitutes for proper nouns or in their singular or plural forms.

I.

Milton の *Lycidas* は、英文学史における三大哀歌の一つとして挙げられている。言うまでもなく、あと二つは、Shelley の *Adonais* と Tennyson の *In Memoriam A. H. H.* である。この三大哀歌の中で、*Lycidas* と *Adonais* は、亡くなった友人に牧歌調の名前を与えて、その死を悼む詩となっている点が類似している。しかしながら、この二つの哀歌を詳細に比較してみると、名詞の使い方に顕著な相違があることが認められるのである。タイトルにしても、*Adonais* からはギリシャ神話の Adonis を容易に連想できるのに対して、*Lycidas* は、⁽¹⁾ 馴染みの薄い名前であ

(1) Ivor H. Evans, rev., *Brewer's Dictionary of Phrase and Fable* (London: Cassel & Company LTD, 1975) この中に、*Adonais* という名前について、次のような説明がある。“The name given by Shelley to Keats in his elegy (*Adonais*, 1821) lamenting the latter's death, probably in allusion to the mourning for ADONIS.”

り、またその由来を古典の様々な牧歌に辿ることができるようである。たとえば、John Carey のタイトルに関する注釈によれば、Lycidas という名前は、Theocritus, Bion, Virgil の牧歌に見られ、また Lucan や Sannazaro の詩からも影響を受けているということが窺われる。このように Lycidas という名前は、⁽²⁾Adonais という名前と比べると、古典に非常に通じた読者でなければ馴染みのない名前であり、その由来も曖昧である。しかし、このことによって *Lycidas* の読者はこの詩に対する関心をかきたてられることになるのである。*Lycidas* は、*Adonais* と比較すれば短い詩であるが、その中で使われている固有名詞の数は *Adonais* の場合よりも多い。またその固有名詞も、馴染みの薄いものが多い。Milton は、このような固有名詞の使い方によって読者を遠ざけるどころか彼の世界により一層引き込んでいくように思われる。

この小論では、*Lycidas* をより魅力的にしていると思われる固有名詞、さらに普通名詞、名詞句の効果的な使い方を詳細に吟味することによって、この牧歌的哀歌において歌われている、Milton の友人の死に対する悲嘆、絶望からの再生、新たな出発を考察してみたい。

II.

まず固有名詞の効果的な使い方を見てみたい。

初めに *Lycidas* と *Adonais* における固有名詞の使い方の相違に触れたが、ここで詳細に比較してみる。*Adonais* は、全部で 495 行の詩であり、その中に使われている固有名詞の数は、“Adonais”を除いて 16 個で、馴染み深い、一般的なものがほとんどである。挙げてみると、次のようなものである。“Urania”, “Echo”, “God”, “Phoebus”, “Hyacinth”, “Narcissus”, “Albion”, “Cain”, “Apollo”, “Actaeon”, “Christ”, “Chatterton”, “Sidney”, “Lucan”, “Vesper”, “Rome”⁽³⁾ である。もともと、

(2) John Carey, “Notes” on “Lycidas” in *John Milton: Complete Shorter Poems* (London and New York: Longman Group Limited, 1971), p.232.

(3) Thomas Hutchinson, ed., *Shelley: Poetical Works* (Oxford: Oxford University Press, 1978), pp.430-444. *Adonais* からの引用は、すべてこの版に拠る。

“Apollo”と同義の“Pythian”や“Ireland”を意味する“Ierne”というような一般的でない固有名詞も使われているが、わずかである。それに対して、*Lycidas* は全部で 193 行の短い詩であるにもかかわらず、その中で使われている固有名詞の数は、“Lycidas”を除いて 21 個もあり、そのうち 17 個が馴染みの薄い、一般的でないものである。挙げてみると、次のようなものである。“Damaetas” (36), “Mona” (54), “Deva” (55), “Hebrus” (63), “the Lesbian shore” (63), “Amaryllis” (68), “Neaera” (69), “Arethuse” (85), “Mincius” (86), “Hippotades” (96), “Panope” (99), “Camus” (103), “Alpheus” (132), “Hebrides” (156), “Bellerus” (160), “Namancos” (162), “Bayona” (162) ⁽⁴⁾ である。

Milton は、このような一般的でない固有名詞を多用することによって、読者を平穏な日常の世界から、否応なくただならぬ世界に引き込んでいる。短い詩の中に、馴染みのあるものにせよそうでないものにせよ、これほどまでに固有名詞をたたみかけるように用いているのは、Milton が、かけがえのない一人の人間の死というものを強調しようとしたためではないだろうか。この詩において *Lycidas* という名を与えられた、若くして不慮の死を遂げた Edward King は、実際は Milton の特別な友人というわけではなかったように思われるらしいが、いずれにせよ Milton は知人の夭折に直面して、かけがえのない一人の人間の死というものについて深く考えずにはいられなかったはずである。Milton は、かけがえのない存在である人間の理不尽な死に対する耐えがたい悲しみや不安な気持ちを読者に伝えるためには、日常の平凡な言葉では足りなかったのであろう。これはよく知られているが、Samuel Johnson が *Lycidas* について次のように酷評している。

It is not to be considered as the effusion of real passion; for passion runs not after remote allusions and obscure opinions. Passion plucks no berries

(4) John Carey, ed., *John Milton: Complete Shorter Poems*, pp.232-254. *Lycidas* からの引用はすべてこの版に拠る。

(5) Douglas Bush, “Notes” on “Lycidas” in *Milton: Poetical Works* (Oxford: Oxford University Press, 1986), p.141.

from the myrtle and ivy, nor calls upon Arethuse and Mincius, nor tells of rough satyrs, and fauns with cloven heel. Where there is leisure for fiction, there is little grief.⁽⁶⁾

Johnson は、*Lycidas* は作り物の世界で、そこには真の感情の発露がない、悲しみがほとんど感じられないと言っているのである。しかしながら先に述べたように、Milton は、その作り物の世界を築きあげている多数の固有名詞一つ一つによって、かけがえのない存在である一人の人間の死というものを強調し、読者に軽々しく扱われることのないようにしていると言うことができるのではないだろうか。*Age of Iron* において、Gale H. Carrithers, Jr. と James D. Hardy, Jr. は⁽⁷⁾ “Love was individual and could never be institutionalized.” と言っている。Milton は、若くして不慮の死を遂げたかけがえのない一人の人間に対する、まさにこの愛情を吐露するために、慣用化した固有名詞では満足できず、一般的でない固有名詞を多用しているのである。この点から考えても、Johnson の酷評が一般には受け入れられることなく、この詩が不動の評価を受け続けたのは当然のことである。

既に述べたように、この詩のタイトルになっている “*Lycidas*” という名前にしても、牧人の名前であろうという見当はつくにしてもその名前の由来については諸説あり、読者にその名前について立ち止まって考えさせるという効果がある。あまりによく知られた名前では深く考慮されることなく読み過ごされてしまう恐れがある。Milton は、亡くなったかけがえのない一人の若者に一般的でない名前を与えることによって、読者を立ち止まらせ、その若者への通り一遍ではない哀悼の気持ちを読者に汲み取ってもらいたいと願ったのであろう。Milton が用いているあまり知られていない固有名詞の中の “*Damaetas*” という名前にも

(6) Samuel Johnson, “On Milton’s *Lycidas*” (1780) in *The Pastoral Mode*, Casebook Series, ed. Bryan Loughrey (London and Basingstoke: Macmillan Publishers LTD, 1984), p.71.

(7) Gale H. Carrithers, Jr. and James D. Hardy, Jr., *Age of Iron: English Renaissance Tropologies of Love and Power* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1998), p.262.

同じような効果がある。この名前も、Carey の注釈によれば、その名の由来や、それが当時の誰のことを暗示しているのかには諸説あり⁽⁸⁾、読者がこの名前に出くわしたときこのようなことについて、立ち止まって考えを巡らせるという効果を持っていると言うことができよう。このような馴染みの薄い固有名詞が表わす個性についてじっくり考えるということが、すなわち Lycidas、亡くなったかけがえのない一人の若者への想いにつながっていくのである。さらにまた、よほど古典神話に通じていなければ馴染みのない “Arethuse” と “Alpheus” に関しては、泉の名前、川の名前なのだとして済ますだけでは不十分なのである。その名前が持っている古典神話に基づく伝説、つまり川の神である Alpheus がニンフの Arethuse に恋をして追いかけると、彼女は恐れて逃げて泉となったが、Alpheus は地下に潜って再びその泉に現れて交わったという伝説にまで思いを馳せる必要がある。これは死と再生のテーマに深く関わるものであり、ここでも読者に立ち止まって考えさせる効果があると言うことができる。

このように馴染みの薄い固有名詞に出会う度に、読者は一つ一つ拾い上げてはその由来や暗示するもの、意味するものを推し量ろうとする。そしてそれぞれの固有名詞に対する愛情がすべて、Lycidas によって表わされている一人のかけがえのない若者へと注がれていくのである。

このような一般的でない固有名詞の使用がもたらす効果とともに、特異な単数普通名詞の使用の効果についても、ここで指摘しておきたい。

Now thou art gone, and never must return!
 Thee shepherd, thee the *woods*, and desert *caves*,
 With wild thyme and the gadding vine o'ergrown,
 And all their *echoes* mourn.
 The *willows*, and the hazel *copses* green,
 Shall now no more be seen,
 Fanning their joyous *leaves* to thy soft *lays*.

(8) Carey, pp.242-243.

As killing as the canker to the rose,
 Or taint-worm to the weanling *herds* that graze,
 Or frost to *flowers*, that their gay wardrobe wear,
 When first the white-thorn blows;
 Such, Lycidas, thy loss to *shepherd's ear*.

(38-49) (イタリックは論者のもの。)

引用した箇所 of イタリックの部分の中で, “shepherd’s ear” は, 他の複数の普通名詞と同様に “shepherds’ ears” となっているか, あるいは詩人本人を暗示するように単数の普通名詞 “a shepherd’s ear” か “the shepherd’s ear” となつていてもよいところである。Carey の注釈によれば, これは Shakespeare の *A Midsummer Night’s Dream* にある台詞, “More tuneable than lark to shepherd’s ear, / When wheat is green, when hawthorn buds appear.” (I.i.184-5) を模倣したものと考えられるようである。⁽⁹⁾しかし, ここでは単に Shakespeare の台詞の模倣として片付けるべきではないように思われる。この詩の終わり近くでは, “Weep no more, woeful shepherds weep no more, ...” (165) や “Now Lycidas the shepherds weep no more.” (182) というように, “shepherd” の複数形が使われているのである。このことを考え合わせると, 何らかの意図が読み取れるように思われるのである。Milton が 49 行目で “shepherd’s ear” としているのは, 一般的でない固有名詞の使用の効果と同じ効果を持たせるためではないだろうか。つまり, Milton は, 冠詞のない単数の普通名詞を意図的に使うことで, それに固有名詞としての機能を与え, それによってかけがえのない一人の人間の死というものを強調し, その死を通り一遍ではなく心から悼む気持ちを象徴させようとしていると言ってもよいのではないだろうか。

Milton は馴染みの薄い固有名詞の多用や特異な単数の普通名詞の使用によって, かけがえのない一人の若者の死を強調し, 並々ならぬ哀悼の気持ちを表わし

(9) *Ibid.*, p.243.

ているのである。このことは、詩の始めの “Lycidas is dead, dead ere his prime, / Young Lycidas, and hath not left his peer.” (8-9) に顕著に示されていた。Milton は、亡くなった若者がいかにかけがえのない存在であったかを示し、そして彼の死をいかに深く悼んでいるかを示している。Robert Frost の “To E. T.” という友人の詩人の死を悼んだ詩の中の, “... and [I] call you to your face / First soldier, and then poet, and then both, / Who died a soldier-poet of your race.”⁽¹⁰⁾ という淡々とした調子と比べると、大げさに思われるかもしれない。しかし Milton は、大げさなまでに、若者のかけがえのない存在とその死を浮き彫りにしたかったのである。そしてそのための最大の効果的な手段が、一般的でない固有名詞の多用と特異な単数の普通名詞の使用だったのである。

III.

次に、固有名詞ではなく、普通名詞や代名詞や名詞句が用いられることによって、この詩にもたらされている二つの効果について論じてみたい。一つは、非常に強い軽蔑の気持ちが表わされるということである。そしてもう一つは、非常に厳かな畏敬の気持ちが表わされるということである。前者の例としては、特に “the rout” (61), “such” (114), “the grim wolf” (128), “nothing said” (129) が挙げられる。後者の例としては、特に “the pilot of the Galilean lake” (109), “the guarded mount” (161), “angel” (163), “him that walked the waves” (173) が挙げられる。

まず、非常に強い軽蔑の気持ちを表わす普通名詞や代名詞や名詞句の例を詳しく見ながら、その効果について考察したい。“the rout” が Orpheus を八つ裂きにした “the Thracian women” を指しているということは、明らかなことである。⁽¹¹⁾ なぜ Milton は、“the rout” として “the Thracian women” としなかったのであ

(10) Edward Connery Lathem, ed., *The Poetry of Robert Frost* (London: Jonathan Cape, 1972), p.222.

(11) Carey, p.244. 61 行目から 63 行目の注釈を参照されたい。

うか。八つ裂きにされてヘブルスの急流に流され、レスボス島の岸辺に流れ着いたという Orpheus は、ここでは、海の荒波に無情に弄ばれている Lycidas と重なり合っているのである。Milton は、Orpheus を虐殺した者たちに明確な名詞を与えないことによって、その者たちに対する非常に強い嫌悪感と軽蔑の気持ちを表わし、そして同時に、海で遭難した若者 Lycidas を死に至らしめたものに対する、はけ口のない激しい怒りと悲しみを表わす効果をもたらしていると言うことができよう。

代名詞 “such” に関してはどうかであろうか。これには “as for their bellies’ sake, / Creep and intrude, and climb into the fold” (114-115) が続いており、詩の中では悪い羊飼いたちのことを意味していて、当時の墮落した聖職者たちのことを暗示しているのは明らかである。⁽¹²⁾しかし Milton は、「羊飼い」あるいは「聖職者」を意味する普通名詞を使っていない。そのような普通名詞を使用することすら自らに禁じるほどに、彼は私利私欲にとらわれた墮落した聖職者たちに対する激しい侮蔑の気持ちを抱いているのである。“such” という一語の代名詞には、そのような墮落した聖職者たちに対する怒りと軽蔑が込められていると言うことができよう。そしてそれによって、善き羊飼いとしての Lycidas の理不尽な死というものと、それに対する深い悲しみが、さらに一層浮かび上がってくる。

墮落した聖職者に対する軽蔑の気持ちを表わしたものと言えば、他に “the grim wolf” がある。これは、Carey の注釈によると、ローマ・カトリック教会、特にイエズス会のことを暗示しているようである。⁽¹³⁾ただこれは前述の二つの例とは異なり、慣習や伝統に基づいているところがある。Bush の注釈によると、“wolf” という言葉は、ピューリタンがカトリックをのしる際によく使われる言葉だったようである。⁽¹⁴⁾また、Thomas McFarland の次の指摘を考慮に入れてお

(12) *Ibid.*, p.248. 113行目から131行目の注釈を参照されたい。

(13) *Ibid.*, p.249.

(14) Bush, p.146.

く必要がある。

Topical reference is not alien to pastoral either. In fact, one use of the pastoral, from Theocritus and Virgil through Spenser and Milton, was the deliberate masked presentation of people or events from actual life, sometimes, especially in the *Shepherd's Calendar* and *Lycidas*, with the object of satirizing abuses.⁽¹⁵⁾

上の指摘にあるように、牧歌には実名を伏せて時事問題に言及するという伝統があるようである。しかしながら、いずれにしても“the grim wolf”という表現は、一般読者にとっては謎めいており、何を暗示しているのかについて立ち止まって考えさせる効果があると言うことはできよう。ピューリタンとしての Milton は、ここでは慣習や伝統を効果的に利用することによって、ローマ・カトリック教会に対する軽蔑や非難の気持ちを表わし、若者の理不尽な死に対する憤りと深い悲しみを際立たせているのである。

さらに謎めいているのは、“nothing said”である。この表現では誰によって何とも言われていないのかが明らかにされていない。これも、意図的にそうすることによって Milton があるものへの軽蔑や憤りの気持ちを表わそうとしたものと考えることができる。*The Golden Treasury of the Best Songs and Lyrical Poems in the English Language* に収められている *Lycidas* に付された C. D. Wheeler⁽¹⁶⁾ の注釈には、“without any protest on the part of the Protestants”とある。つまり、“the grim wolf”, ローマ・カトリック教会の悪辣な行為に対して、プロテスタント、ピューリタンから何の抗議の声も上がらない、ということである。Milton は、“nothing said”の“said”が誰によってなのかを敢えて示さないことによって、墮落したプロテスタントに対しても容赦なく非難の声を上げているの

(15) Thomas McFarland, *Shakespeare's Pastoral Comedy* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1972), pp.68-69.

(16) C. D. Wheeler, “Notes” on “Lycidas” in *The Golden Treasury of the Best Songs and Lyrical Poems in the English Language*, selected and arranged by Francis Turner Palgrave (London: Oxford University Press, 1931), p.564.

である。“the grim wolf”に続いて謎めいた表現である“nothing said”から、若者の理不尽な死に直面して、Miltonが日頃から抱いていた怒りと軽蔑の気持ちを一挙に噴き上がらせていることが窺える。

次は、非常に厳かな畏敬の気持ちが表わされている普通名詞、名詞句の例を詳しく見ながら、その効果を考察することにする。既に述べたように“the pilot of the Galilean lake”, “the guarded mount”, “angel”, “him that walked the waves”がその例である。それぞれ明確に“St. Peter”, “St. Michael’s Mount”, “Michael”, “Christ”⁽¹⁷⁾という固有名詞が使用されてもよいところであろう。古典神話の神々の名前に関しては直接的に固有名詞が使われているのである。Miltonは、古典とキリスト教の融合を試みたクリスチャン・ヒューマニストであったが、キリスト教徒としての意識がここに強く表わされていると見ることができるように思われる。ここで固有名詞が使用されていれば、あまりに明確すぎてそのまますんなりと読み過ごされてしまう恐れがある。間接的に表現してあることによって、一瞬でも読者は立ち止まって考えることになるであろう。そしてその立ち止まった瞬間に、非常に厳かな畏敬や畏怖の念に襲われるのであろう。もちろん、“the pilot of the Galilean lake”と“him that walked the waves”に関しては、Northrop FryeがArethusaとAlpheusの神話について“⁽¹⁸⁾This myth ... unites the water imagery with the theme of disappearance and revival.”と指摘しているように、Miltonは、再生のテーマに繋げるために水のイメージを使った表現を用いたのかもしれない。しかし、Lycidasの再生に関わるものであればこそ、それに対する強い気持ちがそこに込められているはずである。Miltonはその気持ちを、明確な固有名詞ではなく間接的な表現によって効果的に表わしていると言うことができるのではないだろうか。

また、“the guarded mount”に関してはE. M. W. Tillyardの、当時の政治的

(17) Carey, pp.247, 252-253.

(18) Northrop Frye, “Literature as Context: Milton’s *Lycidas*” (1958) in *The Pastoral Mode*, Casebook Series, p.207.

背景に基づいた解釈がある。⁽¹⁹⁾ もちろんこの表現には、“the grim wolf”に当時のローマ・カトリック教会に対する非難が込められていたように、ローマ・カトリック教会の勢力からイギリス国教会が護られなければならないという気持ちが込められているのであろう。ただこの表現にはまだ他にも注目すべき点があるように思われる。それは、政治的な感情から“guarded”という言葉は必要だったにせよ、誰によってであるのかが明示されていないのはなぜか、ということである。すぐ前の“the great vision”すなわち後に出てくる“angel”によってであるということはすぐに理解できるにしても、そのどちらも固有名詞によって明示されてはいない。一種謎めいている。ここにも、読者に立ち止まって考えさせようという Milton の意図が窺える。読者の脳裏に St. Michael の名前が浮かぶ瞬間が大事なのである。畏怖の念に襲われるその瞬間を、Milton は、Lycidas の再生、そしてさらに Lycidas の死を嘆き絶望している牧人、すなわち Milton 自身の再生への祈りに変えようとしているように思われる。

IV.

最後に、複数名詞によっていかに効果的に再生のプロセスが築かれているかについて考察したい。Lycidas の始めと中ほどまでは、かけがえのない友人 Lycidas の死に直面した牧人の悲嘆と絶望、そして世の中の墮落と不正に対する激しい軽蔑と怒りが述べられている。しかしその激しい感情は、次のように転調を迎える。

Return Alpheus, the dread voice is past,
That shrunk thy *streams*; return Sicilian muse,
And call the *vales*, and bid them hither cast
Their *bells*, and *flowrets* of a thousand *hues*.
Ye *valleys* low where the mild *whispers* use,

(19) E. M. W. Tillyard, *Milton*, Supplement to British Book News 26, (London: Longmans, Green & Co., 1952), pp.12-13.

Of *shades* and wanton *winds*, and gushing *brooks*,
 On whose fresh lap the swart star sparely looks,
 Throw hither all your quaint *enamelled eyes*,
 That on the green turf suck the honied *showers*,
 And purple all the ground with *vernal flowers*.

(132-141) (イタリックは論者のもの。)

この引用の始めは, Alpheus と Sicilian muse つまり Arethuse への呼びかけになっている。これは、既に触れたように、再生のテーマに関わるものである。従って、ここから再生の兆しが現れ始めることになる。そしてこの再生の兆しを, Milton は、イタリックで示してあるように複数名詞を多用することによって効果的に表現している。引用のイタリックで強調してある複数名詞の中で、特に注目したいものは、“bells”, “flowrets of a thousand hues”, “enamelled eyes” そして “vernal flowers” である。これらはすべて「花」を表わし、修飾語によって「色とりどりの花」であることがわかる。そして最後の “vernal flowers” によって「春の花」であることがわかる。これは、植物の豊饒を示すものであり、悲しみを克服するための将来の希望の象徴である。この表現は、再生の兆しが一段と強まったという印象を与える役目を果たしている。

この後、再生への道を飾るかのように様々な花の名前が挙げられていくのである。花のカタログについては、Northrop Frye は、“In the great roll-call of flowers towards the end, most of them early blooming flowers like the ‘rather primrose’, the spring returns.”⁽²⁰⁾ と言っている。Frye は、この指摘の前に、詩は花を枯らす秋のイメージで始まったと言い、ここで、花のカタログにおいて春が戻ってきていると指摘している。また Thomas McFarland は、牧歌自体の中心的な効果、つまり “to soften the harshness of actuality, especially to soften the fact of death” という効果が、Milton のこの花のカタログにおいて現れている、と指摘し

(20) Frye, p.206.

(21) ている。このように Alpheus と Arethuse への呼びかけによって再生の兆しが現れ、それが “vernal flowers” で強まり、花のカタログにおいて再生への道が切り開かれていくとすることができるのである。

さらに再生の重要な象徴と見なすことのできる複数名詞として, “dolphins” (164) を挙げることができる。

Ay me! Whilst thee the shores, and sounding seas
 Wash far away, where'er thy bones are hurled,
 Whether beyond the stormy Hebrides
 Where thou perhaps under the whelming tide
 Visit'st the bottom of the monstrous world;
 Or whether thou to our moist vows denied,
 Sleep'st by the fable of Bellerus old,
 Where the great vision of the guarded mount
 Looks toward Namancos and Bayona's hold;
 Look homeward angel now, and melt with ruth.
 And, O ye *dolphins*, waft the hapless youth.

(154-164) (イタリックは論者のもの。)

再生の兆しはあるものの、引用にあるように羊飼いは Lycidas の死を深く嘆き悲しんでいる。しかしながら、Gale H. Carrithers, Jr. と James D. Hardy, Jr. がその共著の中で “Michael's vision recommitted and reoriented the ‘swain’” と指摘しているように、Lycidas の死を悲しみ絶望していた羊飼いが、ここで天使マイケルの幻に Lycidas の再生を願い、自らも立ち直る機会を得ることになるのである。そしてここでもまた、複数名詞の効果的な使用が見られる。それが “dolphins” である。いるか自体、古典神話やキリスト教において救済あるいは再生の象徴と見なされているが、ここでは複数形になっていることで、さらに再生の

(21) McFarland, p.135.

(22) Carrithers, Jr and Hardy, Jr., p.246.

象徴であることが強調されているように思われる。Carey の注釈ではどの古典神話に基づいているかについてのいくつかの解釈が紹介されているが、Milton が複数形にしている点については言及されていない。またこの注釈によると、古典神話においては、救済に現れるのは一頭のいるかのようである。⁽²³⁾しかし Bush の注釈によると、同じ古典神話において、複数のいるかが運ぶとある。⁽²⁴⁾ここでは、“dolphins”と複数形になっていることにも注目すべきであるように思われる。一頭のいるかでも十分に救済と再生を象徴するであろうが、Milton は、さらに複数のいるかに呼びかける形で、より一層確かな再生を強く願う気持ちを表現したかったのではないだろうか。

こうして再生を強く確信するに至った羊飼いは、次のように語る。

Weep no more, woeful *shepherds* weep no more,
 For Lycidas your sorrow is not dead,
 Sunk though he be beneath the watery floor,
 So sinks the day-star in the ocean bed,
 And yet anon repairs his drooping head,
 And tricks his beams, and with new spangled ore,
 Flames in the forehead of the morning sky:
 So Lycidas sunk low, but mounted high,
 Through the dear might of him that walked the waves;

.....

Now Lycidas the *shepherds* weep no more;
 Henceforth thou art the genius of the shore,
 In thy large recompense, and shalt be good
 To all that wander in that perilous flood.

(165-173, 182-185) (イタリックは論者のもの。)

(23) Carey, p.252.

(24) Bush, p.147.

羊飼いは、Lycidas の再生を堅く信じ、仲間の “shepherds” にもう泣かないようにと呼びかける。そして今度は Lycidas に呼びかけて、“shepherds” はもう泣かないと誓う。かけがえのない Lycidas を失い悲しみに暮れていたとき、“shepherd’s ear” にとってその死は耐えがたく痛ましいものだったと語られていた。冠詞もない単数の “shepherd” が使われていることでかけがえのない一人の人間の死というものが強調されていた。しかしここでは、イタリックで示してあるように、複数の “shepherds” が使われている。これは、Lycidas の再生を確信した羊飼いの将来の希望を象徴していると言うことができるように思われる。

羊飼いが Lycidas の再生を確信し、彼自信もまた立ち直り将来の希望を持つに至る最後の一節にも、効果的な複数名詞の使用が見られる。

Thus sang the uncouth swain to the *oaks* and *rills*,
 While the still morn went out with sandals grey,
 He touched the tender stops of various *quills*,
 With eager thought warbling his Doric lay:
 And now the sun had stretched out all the *hills*,
 And now was dropped into the western bay;
 At last he rose, and twitched his mantle blue:
 Tomorrow to fresh *woods*, and *pastures* new.

(186-193) (イタリックは論者のもの。)

牧歌の世界を作りあげる名詞が、イタリックで示したように、すべて複数形になっていることによって、悲嘆と絶望の淵から立ち上がった羊飼いが豊饒を享受する活力のある牧歌の世界に再び戻り、将来の希望に身を託していることが、非常に効果的に表わされている。最後の一行には下敷きがあるようであるが、⁽²⁵⁾特に、羊飼いの主な仕事の間である “pasture” が複数形で表わされているということは、羊飼いの将来の希望を象徴するものとして決して見過ごすわけにはいかない。

(25) Carey, pp.254-255.

そしてここには、かけがえのない若者の理不尽な死に対する悲しみと不安を乗り越えた Milton 自身の、詩人としての将来の希望が込められているのである。

V.

これまで論じてきたように、名詞の効果的な使い方を吟味することによって、*Lycidas* の世界がますます魅力的に浮かび上がってくる。ケンブリッジ大学のクライスト・コレッジの卒業生であった Edward King の夭折に際して学友たちによって編まれた追悼詩の中の一つであった詩が、時を経て英国だけでなく異国の地の一般読者によっても鑑賞されているのである。Milton は、このことを願っていたかのように、一般読者を一見遠ざけるかのように思える詩風を逆手に取って、銜学趣味に陥ることなく、効果的に彼の世界に一般読者を引き込んでいるのである。一般には馴染みの薄い固有名詞を多用することによって、一般読者を立ち止まらせ、詩人の若者の死に対する通り一遍ではない悲嘆の気持ちを汲み取らせ、またかけがえのない一人の人間の死というものに思いを至らせている。そして固有名詞だけではなく、冠詞のない普通単数名詞によっても、固有名詞と同じ効果をもたらしている。さらに普通名詞、代名詞、名詞句の効果的な使用によって、一般読者はそこから詩人の非常に強い軽蔑の気持ちや非常に厳かな畏敬の気持ちを汲み取ると同時に共感することができるようになっている。また複数形の名詞によって、*Lycidas* とその死を嘆く牧人、そして Milton 自身の再生のプロセスが、非常に効果的に表わされているのである。

Milton は、*Lycidas* においてこのように名詞を効果的に用いることによって、*Lycidas* の死と再生、さらに、かけがえのない一人の人間の死に直面しての詩人自身の悲嘆と絶望という一種の墮落とそれからの再生を一層際立たせることに成功している。死というものに対する不安、絶望を乗り越えた Milton は、未来の一般読者をも見据え、将来に対する希望を“mantle blue”に込め、新たな“pastures”に向かって再出発するのである。